シリー島を経てアフリカの北岸、東ローマ帝国、さらに東方のアラビア文化圏との深いつながりがサレルノ医学の背景にある。この点がサレルノ養生訓の内容にどのように関係しているのか考えてみたい。

（名古屋衛生技術短大）

フランスにおける最初の医学新聞を発行したニコラ・ド・ブレニーについて

大村敏郎

我が国の江戸時代に相当する十七・十八世紀のパリの医学史をひもとく時、パリ大学医学部の医師達とその他の医療担当者達との間の葛藤の歴史を無視することは出来ない。

パリの医学部と対立するグループとしてはサン・コームの外科学校に属する外科医達、国王側近のモンペリエ派の医師達、そして王立医学植物園に根城をもつ解剖学者達があった。これらの力が結集されて一七三一年王立外科アカデミーが創立されることとなる。

これに先がけて、何度か医学部への挑戦を試みた一匹狼がいた。今回その一人であるニコラ・ド・ブレニー（Nicolas de Blégny）をとりあげて紹介したい。フランス最初の医学

専門新聞を創刊した人物であるが、我が国の文献では佐藤三吉氏の外科学史の中でヘルニア外科医としてのブレニーの名に接する以外は殆んど見かけない。この人物を調べていくうちに、ルイ14世時代の大変興味ある医療事情を汲みとることが出来たのである。

ニコラ・ド・ブレニーは一六四二年に生まれ、十三歳から外科の修業を始めた。王の軍隊や一般病院（当時は病人の他に貧民や身寄りのない者、精神障害者を収容していた）並びにパリの外科医のもとで、外科助手として働いた後、一六七九年宮廷裁判所つきの四人の外科医の一人になる権利を買った。その頃ヘルニアに対しては手術を行うことをせず、包帯をうまく巻いて保存的な治療をしていたが、ブレニーはその包帯の技に優れており、弾性包帯も考案している。それが国王の首席医師ダカン（D'aquin）に認められて、王妃マリー・テレーズの外科医に任ぜられた。ダカンはモンペリエ出身のユダヤ人で、七年後には国王ルイ14世の痔瘻の手術を外科医フェリックス（Félix）にさせるような開けた考え方の人で、王の側近医師としてブレニーのような能力のある人間を集めておきたかったらしい。

ブレニーはフォーブール・サン・ジェルマンに住み、産婆を妻に迎えた。そしてゲネゴー通りに解剖の円形講堂と化学実験室、それに二床だけではあったが治験用のベッドのある病院を作り、医師・外科医・薬剤師・学者を集めて患者の苦痛を軽くする方法について毎日討議を行った。ここでは貧乏な人々に無料で治療を施した。

やがて「医学の新発見のアカデミー」と名づけた組織にして、その広報手段としての新聞を隔週に発行したのである。一六七九年二月に第一号が出る。これらの活動には国王の医師ダカンの後援があった。

医学部のすぐ近くに、小規模ながら新しい医学部様のものが出現したのであるから、医学部は大いに驚き怒ったが、ブレニーは気にもせず、当時イギリスで使われて有効であった新薬キンキナを処方しつづけて成果をあげ、翌一六八〇年には王弟オルレアン公フィリップの外科医の地位を手に入れた。

しかし新聞による医学部に対する攻撃が度が過ぎたのが原因で、新聞発行権を取り上げられ、一度はオランダへ去るが、一六八三年には舞いもどって再び活動をつづけるの

である。その間にノルマンディのカン大学の医学博士号を得て、一六八五年に登録すると共に王弟オルレアン公の医師となり、八七年には国王付きの医師に昇格する。

一六九一年にはある宗教団の土地を手に入れてメゾン・ド・サンテという病院を建て、不治の病と診断された人々の治療に意欲を示した、しかし一六九三年、彼の形やぶりの活動が山師的であり、病院も淫売屋に外ならぬと判断されて、アンジェーの城に八年間幽閉された。その後自由を得てイタリー各地を旅し、最後はアビニオンで医業を行っていたが、一七二二年八十歳で死亡した。

彼の多方面の活躍をまとめると、第一の業績はヘルニア外科医としての包帯法の技であり、それが出世の糸口であったが、途中から医師に昇格して宮廷とパリの町を舞台に活躍した。第二に医学部に対抗するようなアカデミーを作って、教育にまで手を拡げようとしたこと。当時は大臣コルベールが作った科学アカデミー（一六六六）はあったが、外科アカデミー（一七三一）や医学アカデミー（一八二〇）よりずっと先がけたものであった。

第三はアカデミーに付属した新聞の発行である。最古の新聞は一六〇九年にシュトラスブルクで出ており、一六三一年にパリで創刊された「ガゼット」は医師の手によってなされたものではあるが、医学専門の新聞はブレニーのが初めてである。その中に取り上げられたキンキナこそ、後にキニーネと同定される南米原産の薬物である。第四に国王を説得して、このキンキナを大量に買入れるべく奔走して、主要な病院にそれを配置させるという事業家でもあった。

短期間に地位を駆け昇ったことと、思い切った活動とが災して敵をつくり、晩年は不遇であったが、ブレニーの生涯には男のロマンを感じさせるものがあるように思う。

（川崎市立井田病院）